

新しい農薬と

その使い方 (その5)

農業技術研究所

能 勢 和 夫

～殺菌剤～

殺菌剤には病原菌の活動を抑えるだけで、葉がなくなると病勢が烈しくなるいわゆる静(制)菌剤と、病原菌を殺してしまう文字通りの殺菌剤とがある。

後者では病徴が現われはじめてから散布しても回復するが、あまり種類は多くなく、ほとんどが抗生物質である。静菌剤では、予防的に散布しておかなければ効果が期待できない。

イネいもち病用にはリン酸エステル系、抗生物質系、有機塩素系の3者がある。有機塩素系のプラスチックはイネへの薬害は小さいが、わら中に多量に残り、堆肥にする間に有害なペンタクロル安息香酸に変化し、野菜などに烈しい薬害を出すので実際上使えなくなった。

抗生物質系には**ブラS**と**クスミン**とがあり、ともに文字通りの殺菌剤である。ブラSは眼を痛めるおそれがあることと、薬害斑を生ずる欠点がある。両者とも残効性が短かく適期散布が必要である。

リン酸エステル系には**キタジンP**、**ヒノザン**、**イネジン**などがある。予防的効果に優れ残効性も大きく、病害発生がないときでも生育をよくし増収傾向が見られる。しかし悪臭があって、収穫物の異臭にも関係するように疑われがちなのが欠点である。キタジンPは粒剤を水面に散布しても効果があり、省力法として注目されている。

イネ紋枯病にはメチルヒ素系の**アソジン**、**モン**、**モンゼット**のほか、抗生物質の**ポリオキシン**が有効である。白葉枯病には**ジチオカルバミン酸**、**ニッケル系**、**フェナジン**、**クロラン・フェニコール系**、**セロサイジン**などが一応有効であるが、44年

度の試験で非常に効果の優れたもの(TF-128)が現れ、水面施用でも効果が著るしく、来年以降の実用化が期待されている。

野菜や果樹の地上部病害には**ボルドー液**が長い間王座を占めていたが、ボルドー液を使わない栽培体系も確立し、不足する石灰分を別に与えるほどになった。これまで、露菌病、疫病に**銅剤**、うどんこ病に**水和硫黄**、広範な病害に**銅水銀剤**や**ダイキン**、**オーソサイド水和剤**などが使われてきた。

ハウス栽培が行なわれるようになって、灰色かび病、菌核病、キュウリの黒星病、トマトの葉かび病など病害の種類と量が多くなり、これまでの薬剤では防ぎきれなくなった。

灰色かび病、トマトの葉かび病、キュウリの黒星病には**マンネブダイセ**や**トリアジン**が使われるが、後者は薬害が出やすく、前者は人によってかぶれる欠点がある。

ユーパレンは灰色かび病の、**レジサン**は菌核病の特効薬である。水和硫黄はハウスでは薬害が出やすいので、うどんこ病に**カウセン**、**モレストン**が使われる。果樹病害には**ダイホルタン**が登場し、ボルドー液駆逐の一因をなしている。

最近次のように、薬害やかぶれがなく有効な農薬が現われ、今後が期待されている。**トップジン**は菌核病、灰色かび病、うどんこ病、炭そ病、ウリ類のつる枯れ病など広い適用範囲がある。ただし、疫病や露菌病にはあまり効かない。

ダコニールは菌核病以外の各種病害に有効で、疫病や露菌病にもよく効く。抗生物質の**ポリオキシンAL**は菌核病、灰色かび病、トマトの葉かび病に治療的効果があり、またうどんこ病にも有効であるが、露菌病、疫病には効果がない。

ベンレートはイネいもち病をはじめ菌核病、灰色かび病、うどんこ病、疫病、露菌病、炭そ病、桃の灰星病、トマトの葉かび病など極めて広い適用範囲があって万能薬の感があり、細菌病に効かないだけで、地上部の病害はこれだけで間に合いかねない。

スクレックスは菌核病、灰色かび病に非常に有効で、桃の灰星病に効果がある。価格の高いものがあり、これら薬剤の混合剤が市場を席捲することになりそうだ。